

平成22年6月18日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間： 2008～2009
 課題番号：20730506
 研究課題名（和文）巡回展示学構築に向けた基礎的研究－博物館間の連携に基づく実践研究－
 研究課題名（英文）A fundamental study on traveling exhibition: practice and research based on museum cooperation
 研究代表者 清水 麻記（SHIMIZU MAKI）
 九州大学・総合研究博物館・専門研究員
 研究者番号：70432888

研究成果の概要（和文）：博物館における巡回展は、館同士の連携協力を促進し、少ない予算・知力・労力・時間をかけることなく、入場者数がある程度見込めるメリットがある。本研究では、博物館における展示のうち、常設展示とは異なる特徴・可能性をもつ巡回展示に関する現状・動向を分析し、実際に巡回展「クジラとぼくらの物語」や茶箱や蚊帳を活用した宅配便サイズの巡回展の開発と、二カ国以上が参加する巡回展のあり方を模索した。

研究成果の概要（英文）：There are some advantages of having traveling exhibitions in museums such as cooperation between different museums and increasing visitors with small budgets and labors. In this study, we research how museums practically can make and run traveling exhibitions between different museums and countries through an original traveling exhibitions “Whale stories with us”. The traveling exhibition recorded 54,743 visitors per year in 11 venues all over Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育学

キーワード：巡回展、博物館、実践研究、博物館連携、クジラ展・サンゴ展

1. 研究開始当初の背景

本研究では、博物館における展示のうち、常設展示とは異なる特徴・可能性をもつ巡回展示に関する現状・動向を分析した上で、（1）国内における巡回展示の特徴の分析や巡回展示がもつ課題を解決するための仕組みづくり（データベースづくりなど）のための基

礎研究を行い、（2）海外の巡回展（開発・運営・展示テーマ）との比較、（3）これまでの巡回展が越えられなかった現場担当者による巡回展共同開発のパイロット・プロジェクトの実施・評価・ガイドラインづくりを進める予定であった。代表者が参加した全米チルドレンズミュージアム学会（2007年シカ

ゴ大会)においては、展示に関する次のふたつの課題が指摘されていた。

① 米国では、中・大型のミュージアムが巡回展(Traveling Exhibition)を開発し、他館への貸し出しに力をいれることで館の活動を活性化させたいというねらいがある。しかしながら、国内のマーケットは既に限られており、今後はアジア市場の巡回展貸し出しに期待をしている。一方、アジアの博物館・美術館側としては、予算面(貸し出し料・輸送費)、展示の文化・解釈の文化的差異などの面が解決されない限り、海外からの巡回展誘致は困難な状況。

② 異文化理解をひとつの目的として建設されたチルドレンズミュージアムは、1970年代に、全米で飛躍的に増えた。建設から30年以上経った現在、ほとんどの展示は古くなっており、当時の文脈で制作された静的な展示は、現在の文脈では文化的に誤っている展示が多く問題である。②がはらむ課題を乗り越えるためには、二カ国以上の複数のミュージアムが現場レベルで連携・協力し、静的に留まらない動的な展示開発を目指すと共に、二カ国以上のミュージアムでの実質的な協力・連携のなかで、共通の展示テーマを設定し、開発していくプロセス・展示手法を検討することで、①及び②に対応できるチミュージアムの国際連携をあり方を研究しようとするものである。日本においては、巡回展自体の情報がまとめられている部分が少ないため、基礎的なデータベースや巡回展の傾向などを探ることから研究を開始する【研究(1)】。次に、海外における巡回展の調査・巡回展開発の体制や手法についての研究をすすめ【研究(2)】、最終年度には、実際に二カ国間のミュージアム同士が協力・連携するパイロット・プロジェクトを実施する【研究(3)】。研究3の部分については、主に代表者が担当する巡回展示「クジラとぼくらの物語」を企画・運営し、国内外のミュージアムの現場の担当者らと共同で追加の展示コンテンツを開発するものとする。

2. 研究の目的

本研究では、博物館における展示のうち常設展示とは異なる特徴や可能性をもつ「巡回展示」に関する現状・動向を分析した上で、(1)国内における巡回展示の特徴の分析や巡回展示がもつ課題を解決するための仕組みづくり(データベース含む)のための基礎的研究を行い、(2)海外の巡回展(開発・運営・展示テーマ)との比較、(3)これまでの巡回展が越えられなかった現場担当者による巡回展示共同開発のパイロット・プロジェクトの実施・評価・ガイドラインづくりを行う。

【研究1】日本における代表的な巡回展示の

データベースづくりとその特徴

【研究2】海外ミュージアムにおける巡回展示の特徴及び開発体制・手法

【研究3】2カ国以上のミュージアム担当者らと共同での巡回展開発手法/プロセスの検討

3. 研究の方法

平成21年度は目的(1)国内における巡回展の特徴や共通する課題を洗い出すために、国内・海外調査で事例を収集した。また、9月には、実際の巡回展示で使用できるパイロットプロジェクトとして、五感のうち「聴覚」とおして体験できる「音」の展示を開発した。開発には、現場レベルのミュージアム専門家・研究者・ユーザーからの評価に基づいて、子どもから大人まで「ふれやすく」「楽しく学べる」コンテンツとして、9種類のクジラ・イルカの鳴き声展示とした。また、テーマを変えても繰り返し使用でき、巡回展として運びやすい「展示のしくみ」を念頭に開発した。平成21年度は引き続き、(1)で収集したデータをデータベース化する研究活動を進めるとともに、目的(2)海外の巡回展(開発・運営・展示テーマ)との比較、目的(3)これまでの巡回展が越えられなかった現場担当者による巡回展共同開発のパイロット・プロジェクトの実施・評価・ガイドラインづくりに向けて、平成21年度の研究成果を応用していく。

4. 研究成果

博物館における巡回展は、館同士の連携協力を促進し、少ない予算・知力・労力・時間をかけることなく、入場者数がある程度見込めるメリットがある。本研究では、博物館における展示のうち、常設展示とは異なる特徴・可能性をもつ巡回展示に関する現状・動向を分析し、実際に巡回展「クジラとぼくらの物語」や茶箱や蚊帳を活用した宅配便サイズの巡回展の開発と、二カ国以上が参加する巡回展のあり方を模索した。下記に得られた結果を要約する。

・これまでの日本の巡回展は、平成12年に開催された「弁当からミックスプレートへ」などの巡回展示など革新的な巡回展も存在するが、共有できるデータベースなどがいないため日本における巡回展示学も実践も育ちにくい。米国のTraveling Exhibition Databaseのように、巡回展の規模、テーマ、コスト、保険など全ての情報が蓄積され、多くの人がアクセスできるデータベースの構築が望ましい。

(<http://www.informallearning.com/database.htm>)

・巡回展は、大型で輸送費・保険代金なども高いものが多いが、全国のほとんどの博物館は大型の特別展示室を持ち合わせない中・小

規模の博物館である。こうした状況を考慮して、宅配便で輸送可能であり、箱をあけてそのまま設営できるお茶箱と蚊帳を活用したクジラ・サンゴ展示を開発した。2010年度は、全国8箇所開催55,000人の入場者数を記録したが、異なる館との連携の際には、お互いが得意な分野の展示を担当することで新しい切り口となることもわかってきた（沖縄県立博物館・美術館での「造礁サンゴ展」への回遊展「サンゴ蚊帳展示」の協力展示の事例より：（例）標本展示とハンズオン展示で協力）

・二カ国以上が参加する巡回展の在り方：海外への輸送費高が問題になる場合が多いため、中小規模のミュージアム同士でも開催可能な「絵ハガキ/ポストカード交換（シカゴ・チルドレンズミュージアムと協力）」による連携や、参加型サンゴ展示（ニットでサンゴを編んでいくワークショップを機軸とし、できた作品を展示として投入：Institute for Figuring, LA と連携）などを企画・実施した。

（今後の巡回展に共通する課題と視点）

巡回展開発・運営に携わり、他の巡回展にもあてはまると思われる課題を列挙する。

・巡回展には十分な予算が必要

・巡回展は、巡回先ごとに環境・かかわる人々・開催の目的が異なる。特に目的の部分は、展示開発側のと受入れ側及びコ運用側の3者のすりあわせと共通理解が大切。

・巡回展は、巡回先の特徴が表れる。展示会場の唯一性・一回性を有しながら、巡回展の継続性の両方を内外に表現していくことが必要。

・巡回展はイベントではない。博物館学・博物館教育学の立場からの巡回展示は、それぞれの地域の特徴・文化に合わせた展示・展開の方法を取捨選択するプロセスが伴う。制作して終わりではない部分に、巡回展開発・開催の実験・実施を繰り返すことによって、展示内容・方法・付属教育プログラムに関する研究は深められる。

・巡回展示は、企画→制作→巡回→保管→収束 という一連の流れで見ていくべきである。巡回展示で扱う展示物が展示物=コレクションである限り、その展示物が最終的にどのように収束するかまでを、活動範囲とする。

・巡回展示の可能性：巡回展は、常設展と異なり動く。その「動」は、A開催会場からB開催会場まで動くだけでなく、展示物に加え、展示に関連する教育プログラムやコミュニケーター養成というソフト面の導入からも、常設展とは異なるテーマや内容を動かしていく可能性が多い。

・巡回展の経験や知を集積し、広く共有していく仕組みが必要（巡回展アーカイブ・センター／巡回展データベース）

・巡回展に関わる人材については、開催会場の環境・条件などにより、展示・プログラム開催の内容・状態が変更されるため、臨機応変に対応できる能力・経験をもつ人材がより必要とされる。学芸員取得単位の課程において、実際の巡回展に関するトレーニングや実務経験者からの講義などにふれる機会があることが望ましいと考える。

・巡回展は、言ってみれば「余計な活動」。

それゆえに、

やるとなれば、巡回展の企画・制作・運営に関わる側が、人々に届けていきたいメッセージは何であるのか、を共有し、巡回展の本来の力を発揮できるしくみづくりを発展させていくことが大切。やるからには、やってよかった、と言える巡回展に。

こうした気づきに基づき、今後の巡回展全体の底上げにつなげるための3つのことを提案したい。

1. 巡回展経験者のネットワーク・交流
2. これまでの巡回展のアーカイブ
3. 博物館に関連する学会における巡回展部門の分科会などの設置

この3つは、実際に巡回展を行う体力・人材が不足している場合にも有効である。通常、巡回展示開催・運営には、大きくとらえて15以上の役割が必要である（館長、学芸員、展示コーディネーター、巡回展コーディネーター、ディベロッパー（資金担当）、マーケティング担当、エデュケーター、広報、展示デザイナー、設営担当、輸送外箱担当、輸送担当、編集担当、写真記録担当、出版担当、保険担当）本巡回展チームは、当初は小規模であったため、上記の機能を重担しながらでは、巡回展を丁寧に進めることができなかった。特に、展示物の登録や保険などの面では、初期段階で立ち遅れが目立ったのが反省点である。そのような中でも、巡回展に挑戦することは、人材不足でありながらなかなか着手できないことを学び、経験を積む絶好のチャンスでもあるといえる。巡回展は、移動するミュージアムそのものである。巡回展にかかわることによって、博物館の課題を明らかにしながら、一人ひとりの博物館人の能力やネットワークを増幅させていくことができる。巡回展の利点は、入場者数・リピーターの獲得と同時に、博物館自体に内側からエネルギーをもたらしてくれることにある。こうした利点を前面に巡回展が進化していくことで、日本における巡回展は今後発展の余地があるのではないだろうか。常設展以上に、外部や他館・他館種との連携・ネットワークづくりにも貢献できる巡回展が、今後の日本の博物館界の潤滑油となり、展示開発者・学芸員・ミュージアムエデュケーター・展示輸送専門家などの技術や知識を高め、博物館自体の耐久力・企画力を鍛錬させていくことに

つながることを十分に理解し、巡回展運営がなされるような時代に期待したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

① 清水麻記、軽留部貴行、高田浩二他、「地域をつなぐ新しい巡回展のしくみ：クジラとぼくらの物語」、展示学第47号、2009年。

② 清水麻記・南博史・平井康之・河野央・三島美佐子、「大学博物館展示と来館者をつなげる教育補助ツールの開発と効果。一骨格標本室セルフガイド及び親子 De クエスチョンの事例から一」、九州大学総合研究博物館紀要、2009年。

③ 清水麻記、加留部貴行他、「新しい巡回展のしくみ『クジラとぼくらの物語』」、九州大学ユーザーサイエンス機構国際フォーラム「巡回展が運ぶもの～その歴史と未来～」報告書、2009年。

[学会発表](計5件)

① 清水麻記、「地域をつなぐ新しい巡回展のしくみ：クジラとぼくらの物語」、日本展示学会、2009年6月19日、筑波大学。

② Maki Shimizu & Hiroyuki Arita-Kikutani, -Whale Stories with Us-Transforming a Traveling Exhibition using Japanese Tea Boxes, Picture Book Theaters and Mosquito nets. ICEE, ICOM: International Committee of Exhibition & Exchange, International Council of Museum
Nov 10, 2009 Field Museum, Chicago, USA

③ 清水麻記、加留部貴行他、「事例1『クジラとぼくらの物語』」、九州大学ユーザーサイエンス機構国際フォーラム「巡回展が運ぶもの～その歴史と未来～」、2008年12月23日、福岡市博物館講堂、福岡。

④ Maki Shimizu “Toward a new system of traveling exhibition- Whale Stories with Us,” AAM: American Association of Museums 2008, WMA (Western Museum Association) Sep, 17&18, 2008, Anchorage, Alaska.

⑤ Maki Shimizu “Traveling Exhibition: “Whale Stories with us” transforms community: new exhibition system and educational programs discovering community stories,” AAM: American

Association of Museums 2008, Market Place of Idea, April 28, 2008, AAM 2008 Denver, Colorado.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

清水麻記 (SHIMIZU MAKI)

九州大学・総合研究博物館・専門研究員

研究者番号：70432888